

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係

一 島 正 真

(1) 大日経住心品の三句の中で悲が菩提心に先導する理由
カマラシーラの『修習次第』Bhāvanākrama (1) には大日
経住心品の三句をどのようにに修習するかを解説している。

āryākṣayamatiridēśe cōktam…… āśvāsāḥ puruṣasya jivita ind-
riyasya pūrvāṅgamāḥ/ evameva mahāyānasamphāra [samud]
āgamāya bodhisattvasya mahākaraṇā pūrvāṅgamā” itī vistarajā/
[G. Tucci; Bhāvanākrama I, p. 187, Serie Orientale Roma IX, 2
Roma 1968]

『聖無尽意教示経』を引用し菩薩の大悲は無尽であること
を述べ、人の出入の息が命根に先導する性質があるがように
菩薩の大悲は大乘のあらゆる利益や智慧の資糧に先導するこ
とを説いている。

漢訳『大乘宝要義論』は竜樹の経集 Sūtra-samuccaya に
相当するがここにも同様のことが『菩薩藏経』を引用し次の
ように述べている。

大菩提心者大悲為先導。此何能知³邪。如菩薩藏経云。若諸菩薩

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係 (一 島)

欲求菩提応以大悲而為先導。譬如士夫所有命根以出入息而為先
導。諸菩薩摩訶薩亦復如是。於所集大乘法中以大悲心而為先導。

『修習次第』は(1)大悲の修習に続き、(2)菩提心の修習、そ
して(3)方便究竟では方便と般若の修習を奢摩多(止)と毘鉢
舍那(観)に当て止観の双運道が悟りへの道、解脱 mokṣa で
あることを強調している。

漢訳やチベット訳では大日経の三句は「仏言わく、菩提心
を因と為し、悲を根本と為し、方便を究竟と為す」という順
に配列されている。カマラシーラは大日経の三句を引用し

“³Vairocanaḥ bodhicitta hetukam upāyaparyavasānam”
pāṇāṇam bodhicitta hetukam upāyaparyavasānam”

という。すなわち「大日経に云わく、一切智は悲を根本と為
し、菩提心を因と為し、方便を究竟と為す」という三句を梵
語で引用している。梵語による大日経の原典が断片としてこ
のようにカマラシーラによって引用されていることは大日経
三句を考察する重要な手がかりとなる。この資料で明らかな

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係（一 島）

ように「悲を根本と為す」という句が「菩提心を因と為す」という句よりも先きに配列されている事実を注意すべきである。

『修習次第』や『大乘宝要義論』でみる限り悲が菩提心に先導する方が自然であるように思われる。何故ならばカマラシーラが自から説くように大乘菩薩の悲は出入の息が命根に先導するようにあらゆる大乘の資糧に悲が先導するからである。

(2) 『修習次第』に引用された『大乘宝要義論』

次に紹介する資料は『大乘宝要義論』すなわち経集 *Sūtra-samuccaya* からの引用である。

(a) 「自から観行の精進修行に住しても他の人に観行をするようにしむけないことは摩業である」という。毘鉢舍那行はすすんで他の人達にすすめるべきことを説いている。〔G. Tucci; *Bhāvanākrama* 3, p. 18, *Serie Orientale Roma* XLIII, Roma 1971〕

この引用は『大乘宝要義論』の諸菩薩二十種の摩事の内十二番目からとったものである。諸菩薩は大悲をもって利他行に精進すべきことを説いている。

(b) 「但だ無為を観察しても有為の善根を厭うことは魔業である」、「菩薩道を知ると雖も波羅密多道を求めないのは魔業

である」。〔G. Tucci; *Bhāvanākrama* 3, p. 22〕

『大乘宝要義論』における第三番目と第九番目の魔事に相当する。

第三の魔事は菩薩の利他行としての方便を強張している。因縁又は業によって生じた有為 (*samskṛta*) の善根を厭うのは魔業であると云う。また九番目は菩薩道の理論を知っている、波羅密多道を実践することを求めないことは魔業であると説いている。

(c) 『大乘宝要義論』では六波羅密多や四摂法等に勇心をもって発勤し已り、また他の人達にもこのような菩薩道に安住せしめる人を名ずけて如来神通行菩薩人という。〔G. Tucci; *Bhāvanākrama* 3, p. 25〕

すなわち自他共に六波羅密多等の菩薩道を実践する人を如来神通行菩薩人と称すると云う。

(d) 「従って聖竜樹は経集に示されている。善巧方便を離れた菩薩は甚深なる法を専心さるべきでない」という。〔G. Tucci; *Bhāvanākrama* 3, p. 27〕『大乘宝要義論』にはこの文に続いて慧と方便の二法は不離であると説き「維摩詰経」を用い「方便無き慧を縛とし、方便有る慧を解」としている。方便と慧は菩薩道の要である。したがって方便を離れた菩薩は甚深なる法を専心する資格が無いと云うのである。善巧方便は菩薩に欠くことは許されない。大悲をもたない人はど

んなに菩提心を発こしても菩薩道は無意味となることを主張するのである。

このような引用からも悲が菩提心に先導する方が菩薩道において重要であることが解る。

(d)の引用文で注目すべき点はカマラシーラは『経集』*Sūtrasamuccaya*を引用し作者を聖竜樹(*Ācāryaśaṅgajñāna*)としていることである。『経集』に相当する漢訳『大乘宝要義論』には作者名は記されていない。この論の漢訳者は『大乘集菩薩学論』と同じ訳者法護(*Dharmapāla* (963~))が当っている。荻原雲来博士は『大乘集菩薩学論』の作者が漢訳では法称(*Dharmakīrti* (650c~))となつてゐるが寂天(*Śāntideva* (650~700))の誤りであることと『大乘宝要義論』の作者も寂天であろうと推定している。

このことから『大乘宝要義論』は寂天の著作であろうと云うことが学界の定説となつてゐた。この論はチベット訳があり、またその註釈書も現存している。両書とも『経集』の作者を竜樹としている。また蔵訳の『経集』は漢訳の『大乘宝要義論』に相当する。

カマラシーラも(d)の引用にあるが如く『経集』の作者を聖竜樹としている。

以上の事実から明らかなように「大乘宝要義論」の作者は竜樹なのであり、寂天ではありえないことが明瞭となつた。

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係 (一 島)

しかしながら「経集」の引用經典の中には楞伽經等も含まれており必ずしも中論等で代表される竜樹とは断定できない。おそらく世親以後に活躍した第二の竜樹なのかもしれない。そしてその後に成立した大日経等の密教經典が成立する上に重要な資料となつたのがこの『経集』であると云つても過言でない。この『大乘宝要義論』は先きにも述べたように大悲を菩提心に先導する扱いをしている。もし大日経の原典に二系統あつたと仮定するなら漢訳や蔵訳の元となつた大日経の原典とは別にカマラシーラが『修習次第』に引用した大日経の原典が在つたことを想像することができる。

「大日経」はおよそ六五〇年頃北西インドで成立したといわれている。このような密教聖典が成立する背景には種々なファクターが考えられる。『大乘宝要義論』もその一つであつたに違いない。

Sūtrasamuccaya についてはブーテン Bu-ston (1290~1364) の「仏教史」で知られてゐるように寂天の三部作の一つであると考えられてゐた。そして *Śiṅgāsamuccaya* はあまりにも大部の作であり *Sūtrasamuccaya* は簡単すぎる作品であるから *Bodhicaryāvatāra* を読みあげたと云う。しかし『大乘宝要義論』に相当する蔵訳 *Sūtrasamuccaya* は寂天の云うような簡単な作品ではない。おそらく寂天は *Śiṅgāsamuccaya* を完成する前に竜樹の『経集』等を参考にした簡単な *Sūtrasam-*

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係（一 鳥）

uccaya を著述したものと思われる。何故ならば Bodhicaryāvalāra 第五章「正知守護品」の一〇六偈には

「或は簡単に、まず「経集」を見よ。そして聖竜樹の作を、第二に努力して（読め）」

と寂天自身が述べているからである。

この偈文にいう最初の「経集」は寂天の作であるが現存しない。次の聖竜樹の作が「大乘宝要義論」なのである。そしてこの論は上來述べてきたようにカマラシーラが「修習次第」第三編で引用したように聖竜樹によって作られた作である。従って今後の学界においては「大乘宝要義論」の作者は竜樹であると改めていただきたい。

○結語

カマラシーラは『修習次第』に大日経住心品の三句を骨格として悲、菩薩心、方便という大乘菩薩道の基本をとらえ止観双運行を実徳目とした。彼は六波羅蜜多を分類し布施から禪定に到る前五波羅蜜を方便 upāya もしくは奢摩多 śamatha とする。そして第六波羅蜜を般若 prajñā もしくは毘鉢舍那 vipaśyana とした。

『修習次第』第三編にはかの有名な「サムエー寺の宗論」が生しく展開している。第五章には中国頓悟禪（牛頭禪）の代表者大乘和尚の説を挙げ「無念、無想こそが輪廻から解脱

できる唯一の方法であり、六波羅蜜の教えでは第六般若波羅蜜のみが正しい教えであって布施等の波羅蜜は愚者の教えである」と云っている。彼は般若波羅蜜無思大乘禪門をとなえている。

これに対してカマラシーラは方便と般若こそ大乘の基本であるといい、大乘和尚の主張するように布施等の方便を否定することは般若をも否定することになり大乘そのものに反することであると反論したことは周知のとおりである。

そして『修習次第』第三編 第七章の結論に竜樹の言葉として『大乘宝要義論』Sūtra-samuccaya を引用し大乘の菩薩にとって「善巧方便」が如何に大切かを述べて

「善巧方便を離れた菩薩は甚深なる法に専心さるべきでない」と説いている。大乘仏教では方便は慈悲として解釈されるようになった。すなわち般若は空性と同義語として扱われ、方便は慈悲 (caruṇā) として扱われる。一般的に大乘の經典では方便は衆生を真理に導くための使者の役を演じている。そのためには菩薩の悲が重要な役割をもち、方便と慈悲は同義語化されていたように思われる。

大日経「住心品」にみられる「方便を以て究竟となす」は菩薩の慈悲を方便として考え慈悲こそ迷える衆生を悟りへ導く最高の方便であると解釈することができる。

「住心品」の三句も、カマラシーラに依れば「慈悲を根本

とし、菩提心を因とし、方便を究竟とす」という配順になる。かくして大乘仏教においては大悲方便が利他行の基本となってきたのである。

カマラシーラは『修習次第』においても多くの大乘經典を引用し論証しようとしている。何故ならば經典は仏陀の言葉であるからである。寂天の『菩提行経』や『大乘集菩薩学論』も經典を多く引用し論証する方法をとっている。その理由は当時の仏教界が中観派や瑜伽行派があまりに哲学的に発展した結果、衆生に対する配慮が欠けていたことが考えられる。また經典を引用することは仏陀の言葉を伝えることになる。

以上のような背景の中で『大乘宝要義論』が重視されカマラシーラの『修習次第』にも引用されたのである。

- 1 『大乘宝要義論』法護・惟浄等訳 大正32卷 No. 1635 蔵訳 mdo kun las btus pa PED No. 5330 (Vol. 102, 81~113pp), Derge No. 3934 [ki 148b¹~215a²].
- 2 大正32卷53頁上中。
- 3 『大毘盧遮那成仏神變加持經 大正18卷1頁中下 蔵訳 rgyu ni byan chub kyi sem so/ rtsa ba ni shin rje chenpo ho/ mthar thugs pa ni thab so/ 藏文大日經 服部融泰校合 昭和六年。
- 4 G. Tucci; Bhāvanakrama I, p. 196, Serie Oriental Roma IX, 2 Roma 1958.
- 5 大正32卷56頁下。6 同頁中。7 同頁下。

『修習次第』と『大乘宝要義論』との関係(一島)

- 8 同卷55頁下。
- 9 同卷72頁上。
- 10 『大乘集菩薩学論』法称菩薩造 法護日称等訳 大正32卷 No. 1638.
- 11 東洋哲学 第九卷第一号 明治三十五年一月所載「荻原雲来文集」大正大学仏教学第二研究室 昭和六年462頁。
- 12 『経集註・宝明莊嚴論』mdo kun las btus paḥi bshad pa rim po che snan baḥi rgyan ches ba, by Ratnakaraśānti PED No. 5331, Vol. 102, 113~168pp, Derge No. 3935 [ki 215a¹~334a²].
- 13 Dr. E. Obermüller; History of Buddhism by Bu-ston II part, Heidelberg 1932, p. 163.
- 14 L. V. Poussin; Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra, Biblio theca Indica 1903, 1904, 1905, 1912, 1914, 164p.
- 15 G. Tucci; Bhāvanakrama III, Serie Orientale Roma 1971, p. 13~. F. Olson and Ichishima; The Third Process of Meditative Actualization by Kamalaśīla 大正大学綜合仏教研究所年報(昭和五十四年)66頁。
- 16 Paul Demiéville; Le Concile de Lhasa, 1952 『頓悟大乘正理決』F° 141a.
- 17 S. B. Dasgupta; Introduction to Tantric Buddhism, University of Calcutta 1958, 91~92pp.

(大正大学講師)